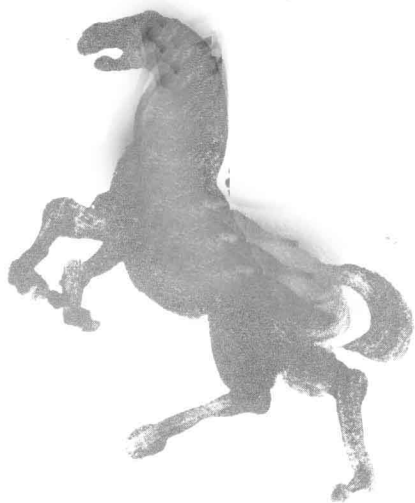


城山三郎 冬の派閥

新潮社

冬の派閥

三郎



新潮社



冬の派閥

著者 城山三郎
しろやまざぶろう

昭和五十七年一月二十日発行

昭和五十七年七月十五日十二刷

発行者 佐藤亮一

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一二 編集〇三(266)五四二一

定価 一二〇〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷所・二光印刷株式会社 製本所・新宿加藤製本株式会社

© Saburō Shiroyama Printed in Japan 1982

冬の派閥
目次

八百屋の死	7
蝦夷地まで	18
評判だけの男	30
不時登城	47
空々茫茫	60
律義な兄弟	78
小細工	94
首実検	105
紅葉屋斬りこみ	121
律義な男	135

参考文獻	328
あとがき	326
終章	309
請書	293
脱落者	272
白一色	252
新天地	221
さらしもの	206
朝命	184
早々帰国	172
一步の功	155

装
幀
麻
田
鷹
司

冬の派閥

八百屋の死

夏の夜は、早く明ける。

乳色のもやが上がつてまもなく、名古屋の南、熱田の船着場から少し離れた海面に、水死体が見えだしているのが、見えた。

ひき上げてみると、まだ若い町人風の男であつた。

ほとんど同時に、常夜灯の傍に、草履をそろえた上に書き置きがあるのが、見つかった。

病苦か、商売の行きづまりからか。それとも、家内外のもめごとにでもよるのか。

ありふれた動機をあれこれ想像しながら書き置きを開いた町方の顔色が、変わった。

そこには、思いもかけぬ文面があつた。

「わたくし、尾張藩支藩の高須に生まれ育つた町人でございます。父祖の代より、高須の殿様の格別有難き御恵みに浴して参りました。また、若殿秀之助さまの御英明を心より慕いする一人でございます。

この度、本藩尾張の御殿様の跡目御相続につき、今度こそ高須より秀之助さま御推戴いたすべく、きところ、またしても、御公儀より御三卿筋を押しつけられるとのうわさ。尾張御家老竹腰山城守さままで、これに御参画あるやに聞き、痛憤に耐えませぬ。

尾張には、尾張支藩高須の血を。ましてや、秀之助さまは、文武共に卓越した御器量にござい

ます。ぜひぜひ尾張のお世継ぎになされたく、熱田の宮に一命をすてて、願かけ奉ります」

町方は、書き置きをつかむと、あわてて熱田奉行へかけこんだ。

熱田は、朝廷とは関係の深い社であり、土地柄として、昔から勤王の気風が強い。ひそかに諸事、反幕府のいうところでもある。

このため、奉行所内にも、勤王を唱える藩内の党派金鉄組の関係者が、幾人か居た。

金鉄組は、もともと幕府からの押しつけ養子に反対するということから発生している。

「志、金鉄の如く堅し」

と血盟を結び、「尾張には尾張の血を」と叫び続けてきた連中である。

町民の中に命をすてるほどの共鳴者が現われた、と彼等は勇み立った。

ほどなく、水死人の身元がわかった。

高須から出て、旗屋町で八百屋を営んでいた男であった。父親の代するとき、高須でふとした縁で藩主松平義建に目をかけられたことがあり、深く御恩を感じていた、という。

だが、そうした事情はともかく、一町民が身をすてて、秀之助の擁立をねがったというのは、金鉄組にとっては、ねがってもない好材料であった。

事件と遺書の内容は、直ちに市中に洩らされた。

それは、たちまち熱田から名古屋城下へ、さらに尾張領内一円へとひろがった。

「秀之助さまを」と望んでいた声に、火がついた。

その火は、江戸へまで、とび火した。

四谷に、高須家の上屋敷がある。

「今度こそ、何が何でも秀之助さまを」

と、家臣団だけでなく、出入りの商人たちまで色めき立った。

一方、尾張へ押しつけられようとしているのは、田安慶頼。十一代將軍家斉の五十余人の子供

の一人である。

田安からは、すでに家齊の十一男、齊^{なりたか}莊が十二代尾張藩主になっており、さらに、十三代藩主にも、やはり家齊の血筋である田安家の少年が入った。ところが、この少年藩主が十四歳で亡くなったため、今回の跡目争いとなった。

「前々藩主の弟を送りこもうというのだから、少しもおかしくはない」

というのが、幕府および田安家側の言い分である。こちらはこちらで、いきり立った。出入り商人たちもその気になって、肩を持つ。

あぐくの果ては、高須家出入りの八百屋と田安家出入りとなが、四谷大木戸近くで、大げんかをはじめた。

江戸っ子同士で、口も荒いし、気も荒い。

田安側に面子があれば、高須側は、同じ八百屋仲間が抗議の入水までしたとあって、退くに退けない。ついに、なぐり合いになった。

たとえ將軍のお膝元とはいっても、子沢山の家齊の押付養子の話には、江戸の人々もうんざりしている。

「また尾張へ押しつけか」

と、高須びいきになり、加勢する者が出る。

田安出入りの八百屋が袋だたきになったところで、ようやく自身番が出て、おさまった。

はでな立ち回りの上、御三家の跡目争いが原因だということで、このけんかは、江戸の町々の話題になり、やがて老中たちの耳にも届いた。

「尾張家中には、すでに徒党を組む者も出ているとか」

「不穏と聞いて居る。まさかとは思いが、いつかの水戸にならって、出府さわぎでも起こされては困る」

老中たちは、顔を見合わせ、眉をひそめた。

老中の心得としては、無事が何より。できるだけ、風波は避けたい。

すでに尾張へは国方の意向を無視し、再三、江戸から跡目を押しつけてきており、むしろ、そのことへの後めたさが湧いた。

いや、尾張相手だけではない。

全国大小の諸藩に、これまで、どれほど多くの將軍の子女を押しつけてきたことか。

実際のところ、老中たちは、將軍の女ぐるいの跡始末に、もう飽き飽きしていたし、押しつけてきた諸藩の反撥の強さも、身にしてみていた。禄高の加増や、家名のひき上げといった餌では、いうことを聞かなくなっている。

反撥のあまり、水戸での騷擾が再現されるようでは困る。

ちょうど、二十年前のことである。

同じ御三家のひとつ水戸家で、八代藩主が重態に陥ったとき、子はなかったが、弟がいるのに不具者扱いにし、やはり家斉の一子を世子に押しつけることにした。

幕府要路と水戸藩江戸家老との間で話が煮つまったが、その話が洩れると、藤田東湖らが檄をとばし、水戸は国をあげての大さわざとなった。

重臣や家中の士が、江戸へかけつける。無願出府である。さらには、百姓や神官僧侶まで、幾百人となく群をつくり、次々と水戸街道を江戸へ打ち上り、松戸の関所で制止はしたもの、人数は野を埋めてふくれ上がるばかり。ついには、関所も破られそうになった。

このさわざのため、水戸への押付養子の話はとりやめとなり、藩主の実弟が世子となり、やがて襲封して、九代斉昭、水戸烈公となった。

烈公と東湖らは、この一件で強く結ばれ、水戸に尊皇運動を根づかせることになった――。幕閣としては、忘れられぬにがい経験であり、高い授業料であった。

水戸にくらべておとなしいといわれる尾張。事実、一度ならず押しつけてきたものの、町人までが憤死するようでは、もはや限界であろう。

すでに十年前、十二代藩主に家斉の子を押しつけようとしたとき、尾張藩内は、今回と同様、高須の秀之助を迎えようという空気だったため、藩士たちの動揺はげしく、きびしい弾劾文を、次々と上書した。

水戸でのさわぎが尾張藩士たちの念頭に在り、

「水戸のときはとりやめたのに、尾張へ強行しようとするのは、尾張を愚弄するものだ」と、いきり立った。

そして、押しつけを承知した御附家老成瀬隼人正正住らに対し切腹を迫る、というところまで行った。

このため、成瀬は病氣と称して退隠。代わって、同じ御附家老の竹腰兵部が、藩士たちの慰撫に当たった。

竹腰はいった。

「血統うんぬんからいえば、高須が尾張家から分かれたのは二代藩主のときであり、その後、水戸家筋から養子が入ったりして、尾張家の血はほとんど絶えている」と。

藩士を慰撫するために、竹腰はさらに、

「前藩主には、將軍の一子を養子に迎える旨の遺書があった」

等々の理由をあげたが、藩士たちを納得させるほど根拠のあるものではなかった。

竹腰が説得しようとすればするほど、藩士たちはしらせ、かえって竹腰に反感を集中し、ついに、金鉄組の結成を見た。

今回は、すでに早々と、その金鉄組と見られる尾張藩有志からの秀之助擁立についての上書請

願が出ている。

町人まで命をすてたとあつては、尾張家臣団は、どんなにはげしい抵抗に出るか知れない――。

幕閣は、ついに折れ、田安慶頼の押しつけをあきらめた。

代わつて、尾張藩待望の高須の松平秀之助が、ようやく十四代藩主の地位につくことになった。嘉永二年（一八四九年）六月のことである。

三万石より六十一万九千石へ。木曾を加えると、実収は百五十万石を越すといわれた大藩の藩主へ。秀之助、ときに数え二十六歳。

細面。額が高く、広い。このため、頬から下が削げた感じにさえ見える。濃く太い眉。鼻と口の間がせまく、ややもり上がった厚い唇をしている。

祖父は水戸家から入り、父松平義建は、水戸斉昭と従兄弟に当たる。母は、斉昭の姉。つまり、秀之助には二重に水戸家の血が入っていた。

このため、斉昭の息子である慶喜とは、歳は十三ちがうが、顔つきはよく似ていた。水戸系の顔である。

秀之助は、八人の男の子の第二子であつた。

男の子には、文武の道に秀でさせ、他藩から養子の声のかかるのを待つ、というのが、当時の小藩主たちのひとつの生きる知恵であつた。それは、藩のためにも、その子のためにもなる。

秀之助は、四谷の藩邸できびしく育てられた。見どころのある子であつた。

長男が早逝したあとも、父義建としては、秀之助を高須の跡つぎにする気はなかった。たかが三万石の大名にするには惜しいし、かわいそうである。

高須藩邸は、小石川の水戸藩邸から遠くない。従兄弟同士であり、義兄弟でもあるところから、水戸斉昭がよくあそびに来て、秀之助を可愛がつた。

秀之助が十五歳のときのことである。

齊昭は、「富士」という名の馬で、あそびに來た。気性のはげしい驥馬であった。

だが、少年の秀之助は、みごとに、その荒馬を乗りこなした。

齊昭は感心したあまり、「富士」をそのまま秀之助に贈った。それだけではない。齊昭は、そのあとも、また、うならされた。

酒の入った席で、齊昭が題を出すと、秀之助は即興で、たちまち詩をつくり、それも、みごとな筆蹟で書いて見せた。

齊昭は、またまた感心した。

「子供は、このように育てねばならぬ」

齊昭は、自分にいい聞かすようにつぶやいた。

そのとき齊昭には、二歳になったばかりのわが子慶喜のことが、念頭にあった。後年、その慶喜のために、このすぐれた甥がさまざまな苦勞をなめさせられることになろうとは、思いもしなかった。

齊昭はまたいった。

「秀之助は、高須に置くには惜しい。やはり、宗家に」

内輪の間柄である。遠慮のない話であった。

義建も、大きくうなずいた。

高須にとつての宗家とは、尾張藩であり、ときの藩主に男の子はなく、藩主自身も凡庸で病弱な男であった。

「高須の秀之助さまを世子に」

という声が、早々と藩内に湧き上がった。

翌年三月、この藩主が死に、秀之助擁立の動きとなったのだが、家斉の十一男を押しつけられ

た。今度は遊興好きの男である。

金鉄組など尾張藩有志は、秀之助をあきらめないし、秀之助父子もまた、あきらめない。あてもなく時を待ち、秀之助は四谷の高須藩邸ぐらしを続けた。

秀之助は、うわついたことのきらいな、律義な性格であった。そこへ、遊蕩好きの尾張現藩主への反撥も加わる。まわりが自分を見る目を意識もする。いよいよ、きまじめになった。

母が藩邸内で妓樂を催し、秀之助にも、見るように誘ったが、

「わたしは、かようなものは好みません。いえ、遠ざけて居ります」と、きっぱり断わった。

読書に武芸にと励むうち、日は経ち、年は流れた。

秀之助は、待った。

そして、六年後、その十二代藩主が死んだが、すかさず田安家からの十歳の少年に滑りこまれた。幼いながらに賢明という評判であった。

今度は、待つ秀之助の方が、一回りも年上である。これからいつまで待つのか。果たして、出番はあるのか。

たとえ、その生涯が空しくなろうとも、ここまで待った以上、あとは待つ他なのか。待つことに、律義であらうとするのか。

秀之助は耐えた。地味な性分が、いよいよ地味になる。

秀之助がただ待ち続けている間に、秀之助の弟たちには、できのいい子ということで、父義建の期待どおり、次々に養子の口がかかった。

六男容保（かたもり）が会津二十三万石に、七男定敬（さだあき）が桑名藩主に納まる。維新では、そろって幕府軍の主力となり、勤王方の秀之助とは対立する運命になる。

そして、この兄弟の仲をひき裂くきっかけともなる従弟の慶喜もまた、御三卿のひとつ一橋家